

赤松徹眞

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

豊かな能力を引き出し
知性と活気にあふれる
キャンパスづくりをめざす

1975年以降、10年ごとに大学の将来像を描いてきた龍谷大学。現在は第5次長期計画を推進している。仏教思想に基づく建学の精神の下、「社会から信頼を得るために、教育の質を保证したい」という赤松徹眞学長に話を伺った。

地域との連携で 新たな学び方を提供

長田 貴学の第5次長期計画の冒頭には「教育を重視する大学をめざす」と記されています。具体的にどのようなことをお考えですか。

赤松学長(以下赤松) 大学進学率が50%を超えた今、大学は大衆社会の中での役割が求められています。一方で、高等教育機関としての使命は従来と変わっていません。大学が社会から信頼を得る要素は、教育力であり教育の質を保証することです。これ以外に優先すべき事項はないと考えます。

中央教育審議会の大学分科会では、学生の学習時間の不足が指摘されました。以前から言われてきましたが、より深刻な状況ということでしょう。大学教員が学生に向き合っていないことも原因の一つです。専門分野の研究を続ける中で大学教員になる人が多く、勉強のおもしろさは自ら発見するものと考えがちです。その経験則だけで学生に接すると、大切なものを見落としてしまいます。

最近FDが注目され、研究会も活発に行っているため、学生に向き合う教員が増えています。ただ、教員と学生は世代や学びに対する姿勢が違うので、今の学生の現状に合う学びのスタイルを提供していく必要があります。

長田 地域と連携したプロジェクトも実施されていますが、これも一つの学びのスタイルということでしょうか。

赤松 そのとおりです。本学は地域の事情や違いを把握しつつ、結び付きを大事にしているため、住民と共に地域を動かす体験ができます。これが新たな学びのスタイルとなっています。

例えば経済学部では、2007年から京都府で唯一の村である南山城村の活性化プロジェクトを展開しています。お茶農家と連携し、商品企画、栽培、製造までかかわって「雫」というオリジナルの宇治茶をつくりました。東京の百貨店で行われた物産展に参加するなど、販売にも携わりました。

政策学部では2011年から地域社会の課題解決に正課・課外を通して取り組む「Ryu-SEI GAP」をスタートさせました。伏見や東山の市民活動センターの運営に携わり、新たな公共施設のあり方や運営モデルを検討しています。学生には新しい学びのスタイルを提供し、大学としては地域への貢献を果たすこととなります。こうした学びの場を大学が用意することが重要です。

チャレンジを積み重ね 進路を切り開くために

長田 学生は機会さえつかめば、想像もしないような力を発揮するのではないのでしょうか。

赤松 潜在的かつ豊かな能力を顕在化する場所を提供することが、私たちの使命だと思います。就職して社会に出れば、達成目標があり数値で評価されますが、大学ではつまづいても否定的な評価はされません。チャレンジを繰り返し、経験を積み重ねられるところが大学らしさでしょう。

東日本大震災からの復興を支援するボランティア活動も行っています。2011年6月から12月までの間に5回にわたって大学主催でボランティアバスを出し、130人が参加しました。被災地に身を運び現場に立つことは、人

生の大きな学びとなります。在学中に一度は現地に行ってほしいという思いがあります。学内では物品販売や交流会、石巻専修大学の坂田隆学長を招いてシンポジウムも行いました。真面目に実直に、現実に向き合う姿勢があるのは本学の良いところです。

長田 就職支援にも力を注いでいらっしゃいますが、社会で生きていくためのキャリア教育をどうお考えですか。

赤松 重要なのは、大学4年間の中で自らの進路をどう切り開くかです。自発的な意思を持ちながら選択してほしい。就職は採用する側が選択しますが、採用される学生も自分の職業を選択するのは、入学直後のフレッシュなキャンパスから、就職の話題を盛り込んでいます。そして4年間で幅広い知識と基礎的な専門性を身に付けること。社会では専門性が求められるので、それぞれの分野で修得技法を学ばせたいと考えています。

広島県、徳島県、鳥取県とは就職協定を結んでいます。主に出身者のUターン促進のためですが、自分の出身地を見直す視点を育て、そこに優秀な人材を送り出せば、地域貢献にもつながります。今後はさらに他県とも協定を結んでいく予定です。

2015年農学部新設、 国際文化学部も新展開

長田 第5次長期計画の中で最も大きな改革が学部移転と新学部設置と伺っています。詳しく教えてください。

赤松 滋賀県の瀬田キャンパスにある国際文化学部を2015年に京都市の深草キャンパスに移転し、瀬田には農学部(仮称)を新設する予定です。



あかまつ・てっしん 1949年生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、博士後期課程単位修得満期退学後、龍谷大学文学部講師となる。文学部教授、学部長、文学部長などを経て2011年に第18代学長に就任。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。

「なぜ今、農学部か」という意見もありますが、日本社会の現状や国際的な食糧問題を、「農」という切り口で広く考えていきたいのです。食は人間の生活にとって欠かせない問題です。食の安心・安全をどう守るか、食の循環をどう考えるか、予想される世界的な食糧危機にどう対応するか。これらの解決策を提案し実現できる人材、国際的にも貢献できる農の専門家を育てたい。そのために人文科学、社会科学、自然科学などの領域を融合した4学科で構成します。新しい農業のあり方や魅力も打ち出していくつもりです。

国際文化学部を移転させると、現在約550人いる留学生のほとんどが深草に集まります。ここを多文化共生の実現をめざす拠点としたい。今後は日本の人口が減っていくため、海外から人材を受け入れ、共生を図る必要があります。ほぼすべての講義を英語で行い、大学の国際競争力を高めたいとも考えています。

長田 学長の思いとして、どのような大学にしたいとお考えでしょうか。

赤松 さまざまな課題がありますが、今の大学に必要なのは知性と活気で

す。学生には、本をたくさん読んで知性を磨いてほしい。私が顧問を務めるアメリカンフットボール部では、筋力トレーニングによる体づくりだけではなく、徹底した分析力の強化も課題です。課外活動にも知性が求められるのです。スポーツだけでなく文化系の活動も同じことが言えます。知性に満ちた課外活動が盛んになれば、大学は活気あふれる場となるでしょう。また、さまざまなグループが議論できるような学生の居場所をつくりたい。舞台に立つ主役は学生ですが、われわれは場を提供したいと考えています。

本学では、浄土真宗の教えに基づいた建学の精神を大切にしています。平易な言葉で言えば「平等」「自立」「内省」「感謝」「平和」の精神です。大学で学ぶ間も卒業してからも、人間社会で生きることには変わりはありません。人間は価値観や思いが対立したりすれ違ったりする中で、苦悩に直面します。難しい局面に立ったとしても、必ず克服できる道があります。どんなときも建学の精神に立ち返り、生きていく意味や命の尊さを大切にしたいと考えています。